

平成22年5月26日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530872
 研究課題名（和文）養護学校高等部等の専攻科における教育の在り方
 —二重の「移行支援」に着目して—
 研究課題名（英文）Education in the Post-graduate Courses of Upper Secondary Departments of Special Schools for Children with Special Needs: focusing on the Dual Transition Support
 研究代表者
 渡部 昭男（WATANABE AKIO）
 鳥取大学・地域学部・教授
 研究者番号：20158611

研究成果の概要（和文）：私立養護学校7校，国立養護学校・私立高校各1校など，11校園の専攻科について，その設立の経緯，今日までの歩み，教育課程の特色，進路実態などを明らかにした。加えて，「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援に関する評価すべき取り組みと事例を収集した。その上で，障害青年への青年期教育・中等後教育・キャリア教育の在り方について考察した。

研究成果の概要（英文）：

About the eleven post-graduate courses for children with special needs, set up in upper secondary departments of seven private special schools and one national special school, one private senior high school and others, each process of the establishment, their step until today, the characteristic of the course of study and the situation of graduates were clarified. Valuable practice and example of the dual transition support as both “from childhood to adulthood” and “from school to society” were collected. An ideal method of adolescent education, post secondary education and/or career education for young persons with disabilities was considered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別支援教育，養護学校，専攻科，移行支援，社会生活力，中等後教育，青年期教育，キャリア教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は，科学研究費補助金（1997～98年度）基盤研究C「障害児のトランジション（学校－社会間移行）に関する実証並びに比較研究」の一環として，1999

年度に高等部専攻科を有する私立養護学校7校の調査研究を行った。

(2) 知的障害を対象とする従前の私立養護学校専攻科に加えて，障害青年への移行支援ニーズの高まりの中で，発達障害者を対象に含

めた新たなタイプの専攻科が開かれるようになった。

(3) 2006年度には、国立養護学校ではじめて鳥取大学附属養護学校に高等部専攻科が開設され、研究代表者も参画して「子どもから大人へ」「学校から社会へ」の二重の移行支援に着目した取り組みがスタートした。

(4) 学校教育法改正により、2007年度から特別支援教育の新法制に転換した。特別支援学校の目的は「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けること」(72条)とされ、自立への支援の在り方が注目されている。

2. 研究の目的

知的障害者及び発達障害者を対象とした養護学校高等部等の専攻科における教育の在り方を、「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援に着目して明らかにする。具体的には以下の3点である。

(1) 養護学校高等部等の専攻科に関して、開設の経緯、これまでの歩み、今日の状況、教育課程の特色、進路実態などを明らかにする。

(2) 二重の移行支援に関して、参考になる取り組みと追跡事例を収集し、知的障害者及び発達障害者への移行支援の在り方を明らかにする。

(3) 知的障害者及び発達障害者に対する青年期教育・中等後教育・キャリア教育の在り方について考察し提言を行う。

3. 研究の方法

(1) 対象

① 97年度に調査を行った私立養護学校7校：三愛学舎養護学校(岩手県)、いずみ養護学校(宮城県)、若葉養護学校(群馬県)、旭出養護学校(東京都)、聖坂養護学校(神奈川県)、聖母の家学園(三重県)、光の村養護学校土佐自然学園(高知県)。なお、研究期間の最終版において、光の村養護学校秩父自然学園が2008年度より高等部専攻科を開設したとの情報を得たが、時間的な制約から対象には含めていない。

② 新たに加えた4校園：鳥取大学附属養護学校(鳥取県)、私立鹿児島城西高校(鹿児島県)、NPO法人立見晴台学園(愛知県)、私立やしま学園高等専修学校(大阪府)。

(2) 方法

① 訪問調査の実施(全校園を対象)：学校等の見学、授業等の参観、聞き取り、資料収集など。

② 授業実践への参画(鳥取大学附属養護学校)：高等部専攻科の実践づくりに継続的に参画。

③ 研究フォーラムの開催(全校園に呼びかけ)：「設立の経緯、概要、教育課程」を中心テーマに第一回目を2007年度に開催。

「二重の移行支援」を中心テーマに2009年度に開催。それぞれのフォーラムで得た基本情報を資料冊子としてまとめる。

4. 研究成果

(1) 専攻科における教育

① 三愛学舎養護学校

キリスト教の「神を愛し、人を愛し、土を愛す」という三愛を建学の精神として、1978年に高等部本科を、96年に専攻科を開設し、「5年間の一貫した青年期教育」を探究している。72年に社会福祉法人「カナンの園」が認可され、73年に児童施設「奥中山学園」が開園、同時に町立奥中山小学校及び中学校内に特別学級が設置された。卒業保障として、74年には学園内に私設高等部が設けられ、数年の設立準備を経て、78年に三愛学舎養護(高等)学校が開校した。義務教育段階は公立校で学び、高等部から三愛学舎を利用する。5年間を通じて「自分くずし」から「自分づくり」への過程を援助し、個々に合わせた自己実現をめざして、「生活」「労働」を中心に「生きる力」を育む教育活動が組まれている。本科では「青年期としての基礎的素養を身につける」ことに主眼を置き、教育課程も「生活、芸術、音楽、体育、作業、総合学習」など幅広く構成されている。専攻科は「一人一人に応じた成人生活への移行を図る」ことを目指して「作業」を大きく位置づけ、「総合学習」では金銭管理や余暇の指導も行い、加えて表現創作や体力づくりの時間なども設けている。寄宿舎として福祉施設を活用し、また卒業後の生活部門及び労働部門を併せて整備しており、法人全体として生涯にわたる地域での支援事業が展開されている。

② いずみ養護学校

1969年、私立養護学校で高等部専攻科の設置認可を最初に受けた。女子のみの高等養護学校であり、家庭科中心の青年期女子教育を特色としている。服飾専門学校を開設していた学校法人明和学園内に58年、障害女兒の職業補導場「いづみ学園」が併置され、62年にはいずみ養護学校が開校された。卒業生の進路保障の一環として、65年に養護学校附属授産所が誕生した(71年から社会福祉法人・愛子福祉会いずみ授産所)。生涯が学習であることを見通して、社会の変化に対応した逞しく生きる人づくりをめざし、一人一人の生きる力を育て、家庭生活及び社会生活に必要な知識・技術の習得を目標としている。以前は本科卒業時に就労等をめざす傾向にあったが、近年では卒業生約20名の5割前後が専攻科に進学する。本科では「生活力を高める家庭科」中心の教育課程が組まれており、基本的な生活習慣の確立、基礎的・基本的な知識・技術の習得が目標とされてい

る。専攻科は「職業人・家庭人の育成」を目指しており、社会自立をはかり、主体的に生きる力の育成をめざした職業教育が中心である。本科3年の基礎の上に、個々の進路に応じた班編成の指導（縫製、調理、清掃、手工芸）がなされる。高齢者への簡易家庭介護を含んだ「家庭管理」の学習もある。なお約半数が寮生（明和寮）であり、また全員に自活ホーム実習が保障されるなど、自立への生活指導が学寮連携で行われている。

③若葉養護学校

8年間の養護教育塾の試みを経て、1993年に学校法人が認可、94年より若葉養護学校（高等部本科・専攻科）が開設された。赤城山南麓の標高600mに位置する特色を生かして、「恵まれた自然環境の中で、生徒一人ひとりの能力や特性を考慮し、社会自立並びに社会への参加を目指して、心身ともにたくましく健全な人間を育成する」を目標としている。「作業学習中心の実践カリキュラム」を組んでいるが、本科1～2年では生活単元学習もある。作業学習には、食品製造（調理・クッキーづくり）、染織デザイン（染物・織物）、農園芸バイオ（園芸・委託作業・校外作業）の3コースがある。加えて、地域にあるフラワーパーク・農業テーマパーク・民間企業・研究所・農家などと提携した実習体験・地域貢献活動などが多彩に展開されている。他に保健体育・音楽・美術・クラブ活動も設けられている。ほどよい距離に「杜の子ファーム」があり、日々の登下校や寮生活を通じた指導もなされている（約8割が寮生）。卒業生も通勤寮として利用しており、卒業生と共に暮らし、育ち合う場になっている。他の国公立養護学校からの宿泊体験や職業実習などの受け入れも行われている。02年からは附帯教育事業としてさらに研修科（最長2年）を設け、卒業後の「学校と社会の中間ステップ」として企業体験保障が始まった。また、行き場のない卒業生をなくすために、作業所「杜の実」も開設されている。

④旭出養護学校

養護学校の高等部専攻科としては、2年制ではなく、唯一の3年制である。1950年に豊島区目白町徳川邸内に開園され、58年の各種学校「練馬生活学園」を経て、60年に旭出学園教育研究所を開設、養護学校（小中高併設）も開校された。62年から練馬区東大泉に順次移転し、79年に幼稚部と専攻科が認可された。専攻科は81年の校舍落成を待って開科された。以前は3学年複式1学級と定員も少なく、本科卒業生の数名が進学する程度であった。進路先である福祉園の空き待ちのみでなく、専攻科での継続的な指導・援助によってより自立的な人間に近づけることが意識された。加えて、卒業生の短期（数か月）受け入れによる再教育も先導的に

試みられた。近年は本科卒業生の5～7割が進学している。マカトン法のサインやシンボルを活用した幼少期からの一貫した教育プログラムによって、「身近生活の自立、集団生活への参加、社会生活の理解と参加、生活の常識と技術」を修得した上で、専攻科では「生産人としての自覚」を養い、「目標を持って生活のできる社会人」を目指している。高等部では作業学習・総合学習・進路学習・調理学習・現場実習などが組み合わされている。また、本科・専攻科の2年生全員に生活自立寮での体験（数泊～2か月入寮）も用意されている。卒業保障としては、社会福祉法人を設立して旭出生産福祉園（74年）を隣設し、都内・静岡県・千葉県にも生活労働施設などを整備している。

⑤聖坂養護学校

キリスト教の精神を基盤として、小学部から専攻科までを通して、マカトン法のサインやシンボルを共通に用いた分かりやすい支援に努めつつ、個別教育計画による個性に応じた指導が追求されている。高等部は5年間が一体的にゆったりと位置づけられており（学部内オープンシステム）、障害が比較的重い生徒を含めて、青年期の豊かな感性と人格形成が大切にされている。戦前の1942年に始めた水上学校が戦後の49年に日本水上学校として設立され、51年に学校法人として認可された際に養護施設事業の運営が委託された。54年の財団法人、61年の社会福祉法人日本水上学園を経て、67年には日本水上学校を閉校し、代わって聖坂養護学校（小学部）を開設した。79年に中学部、82年に高等部を開設し、85年に専攻科が設けられた。「進路はあくまでも教育的指導の結果であり、進路自体が教育の目標ではない」という考えから、「狭い作業技術」ではなく、基本的な生活習慣を養い、豊かな情緒・人格を育むトータルな教育活動が志向されている。従来から敷地内の生活棟を活用して生活教育や緊急一時預りもなされていたが、08年に民家（寮）を徒歩圏内に確保してさらに充実された（中学部・高等部本科の2年は全員が1週間入寮、他は希望者が随時体験）。将来ビジョンに基づいて、社会福祉法人を設立して様々な形で生活や労働の場を整備し、生涯教育・生涯福祉を保障する体制の確立に努めている。

⑥聖母の家学園

カトリックの精神に基づいて、固有の人格を認め、個別の発達と集団への参加を促し、生活する力を身につけた人間を育てることをめざしている。高等部目標は「5年間教育の中で自己を知り、社会生活につながる力をつけ、豊かでたくましい人間の育成をめざす」である。専攻科の教育課程は「経済、生活講座、演習、研究ゼミ（修了論文の作成）」

等とユニークであり（『養護学校専攻科の挑戦』かもがわ出版，1999），鳥大附属の下敷きともなっている。1966年にカトリック系教会によって精神薄弱児施設「聖母の家」が設立され，67年から市立内部小学校への通学による学校教育保障が開始された。69年度からは施設内に分教室が設けられ，それが前身となって，71年に「聖母の家」内に養護学校聖母の家学園（小中学部）が開設された。養護学校は87年より高等部を設置し，95年には専攻科が設けられた。その際，聖坂養護学校及び見晴台学園に大きな影響を受け，学園生以外の進学者も受けとめつつ，「5年間の高校生活」保障を特色として打ち出している（本科卒業者のほぼ全員が進学するが，加えて他校から専攻科への進学者もある）。民家を寄宿舎として，遠距離通学生のための生活の場も整えている。卒後保障の一環として，授産施設「わかたけ菽の里」を設けている。また，校内努力によりアフターフォローと地域づくりを目的とした「教育・生活支援センターふれあい」を2008年度より設置している。

⑦光の村養護学校土佐自然学園

「知的障害児教育における実業高校を目指す中学部・高等部・専攻科の8年制養護学校」が，創立者（西谷英雄）の意志である。1959年に高知市立小・中学校養護学級分室の中に光の村職業補導所が併設され，私立学校設立の準備の一環として，66年に精神薄弱児施設光の村学園（71年に光の村わかぎ寮に改称）が開設され，69年に光の村養護学校（本科3年・別科2年）として設立された。当初は実業高校化を目指したが，75年に別科を廃して専攻科を設け，「技術教育を柱とする5年制の青年期学校」（高等養護学校）となった。83年には中学部を開設して思春期を含む「全青年期に対応する教育体制」を整え，86年に秩父自然学園（埼玉県）を開設したのを機会に土佐自然学園と改称している。「暮らしの教育—全面的な自立」「からだの教育—一足から変える全面的な教育」「仕事の教育—プロをめざす—技能教育から技術教育へ」というユニークな全寮制の教育がなされている。また，「大自然の中の全人教育—力強い青年を育成する」とのねらいから，土佐湾一周200キロ徒歩旅行（中学部卒業旅行）や宮古島トライアスロン（本科卒業旅行）などにも挑戦している。社会福祉法人も併せて「生涯教育総合施設」を目指しており，更生施設・通勤寮・グループホームなどを整備し，株式会社も発足させて，全国的な広がりの下に「知的障害児・者総合施設光の村」の事業を展開している。

⑧鳥取大学附属養護学校（現・特別支援学校）

鳥取大学学芸学部附属小・中学校の「特殊学級」を礎に，78年に教育学部附属養護学

校となった。79年には，知的障害養護学校として鳥取県下で最初の高等部を設置し，小学部から高等部までの12年間にわたる教育・研究を先導的に進めてきた。2004年には，学部附属から大学附属となった。04年の国立大学法人化を契機に専攻科開設を模索。既存定員の活用により，06年，国立の養護学校として全国初となる高等部専攻科を開設した。児童生徒は1学年定員が小学部2名，中学部6名，高等部本科8名，専攻科3名の総定員60名であり，専攻科は2学年複式・計6名という少人数である。「『生活を楽しむ子』を育む」ことを教育目標とし，「自分づくり」を支援する教育実践を展開している。特色は，①一人一人の人格的自立をめざした教育，②小・中・高の12年間一貫教育（専攻科を含めると14年間），③大学と連携した教育・実践研究・教育実習，④保護者や医療等の関係諸機関との連携，⑤「段階別教育内容表」「個別の教育支援計画」の活用，⑥地域に開かれたセンター的役割，⑦「さざなみ作業所」との連携，などである。卒業後も，全教員分担による必要な卒業生への訪問（みんなでアフター），夏・冬の計2回の同窓会開催などが行われている。ユニークな実践は，『生活を楽しむ授業づくり』『自分づくり』を支援する学校』（明治図書，2003・05）に詳しい。

⑨鹿児島城西高校

「道義に徹し 実利を図り 勤労を愛す」を建学の精神とする私立高校で，前身を含めると創立80年をこえる。普通科の他に，「好きなことを学んでプロの道を目指す」としてヘアデザイン科・トータルエステティック科・社会福祉科・ホテル観光科・調理科・商業科・ファッションデザイン科の計7学科を有し（入学定員1学年380人），高校サッカーなどスポーツや文化活動でも全国に名を馳せている。また軽度の知的障害者を対象として，普通科に共生コース（99年，特別支援学級の制度を準用，募集人数は普通科全体の定員95人の中で弾力的に運用されており実際には1学年およそ20～30人），さらに福祉共生専攻科（02年，1学年20人）を相次いで設けた。運営は双方を合わせた分掌の「特別支援教育部」が担い，本科・専攻科で一体的に進められている。本科では「可能な限り社会人として，自立や進学への意欲を高める生徒の育成を図る」ことが，専攻科では「可能な限り社会人として，自立できる生徒の育成を図る」ことが，目標とされている（専攻科に進むのは本科卒業生の2～4割）。高校らしい各教科・科目別の学習が組まれており，各学年で30単位を履修する。専攻科では，特に訪問介護員（3～2級）の資格取得に努めており，基礎介護，社会福祉演習・実習，調理，職業訓練などの専門教科

が教育課程の約7割を占めている。

⑩やしま学園高等専修学校

前身の経理商業関係の専門学校・専修学校から、1998年にやしま学園高等専修学校と改称した。本科は全日制（3年制）の経理高等課程（商業科）であり、技能連携制度によって八洲学園高等学校の卒業資格も得られる。しかし、対象生に学習障害や不登校経験の者などが増えて「3年間の修養年限ではすべての生徒が自立して社会に出て行くには短い」との認識から、2003年に2年制の別科＝通称「専攻科」が始まった。当初は専攻科が主に特別支援教育の性格を有していたが、現在では本科を含めて「ゆっくり、ゆったり、まわり道の教育」を求める者が増えている。募集対象は、①教科の学習が不得意で、勉強に自信のない人、②基礎学力（読み・書き・計算）が十分に積み上がっていない人、③運動や体育が苦手な人、④友だちができにくく、コミュニケーションが苦手な人、⑤発達障害の生徒及びそれらを背景とした不登校の生徒、等である。基礎学力と社会性の育成を重視した本科の教育の上に、専攻科では「もっと豊かに！～自律と自立～」を標語に、生きていく力（生活力）を養う体験型の学習と、興味・関心のあるテーマを自ら深める研究型の学習が用意されている。互いに認め合い、ありのままの自分を出し、失敗を経験しながらも自分で考え行動することで、次第に自己肯定感を高めていく。近畿一円からの遠距離通学も自律と自立の体験であり、10時40分開始のゆったりした週時程となっている。

⑪見晴台学園

1990年、全国初の「学習障害児の5年制高校」（無認可の私塾）として、高等部本科・専攻科を開設した。95年に中等部を設け（出席扱いにより学籍のある中学校で卒業証書は出される）、思春期からの支援も行っている。高等部は5年一貫制であり、専攻科への外部進学は認めていない。そこで、2001年には19歳以上を対象とした青年部（4年制）を新たに付設している。なお教育課程上は、中等部と高等部本科は基礎教養教育に、専攻科と青年部は職業準備教育（職業人教育&生活者教育）に位置づいている。すなわち、本科では「言語と数量、自然と社会、技術と人間、芸術と文化、運動文化とからだ」といった大括りの教科学習により「わかる喜び、学ぶ楽しさを知る」ことを重視し、その基礎の上に専攻科では職場見学や実習を行い、免許や資格に挑戦し、趣味や特技を磨き、自主旅行や白山登山、卒業研究にも取り組む（『LD・ADHDが輝く授業づくり』クリエイツかもがわ、2004）。仲間と共に、ゆっくりと学び、自分らしい生き方を見つけて巣だっていくのである。01年には「自立支援

センターるっく」を立ち上げ、就労支援事業や共同生活介護事業など卒後の移行支援を充実させている。02年には、発達障害に関する理論と実践を深めるために見晴台学園研究センターが設立されている。

(2)二重の移行支援

①一貫制による青年期教育

光の村養護学校における専攻科（1975年）の開設は、他校が本科卒業時に離学することを基本としていたのに対して、はじめて本科3年・専攻科2年を一貫させて位置づけ、「5年制の青年期学校」を打ち出した。ただし、職業教育ないし技術教育を前面に出して、自立に向けた鍛錬において青年期をとらえる傾向にあった。

これに対して、聖坂養護学校（1985年）は、5年制高等部における個性の伸長・充実を重視した青年期の教育と社会への移行を唱導した。すなわち、青年期前期を「感性が豊かで、その後の人生の基礎的な情緒や人格をつくる大切な時期」ととらえ、「感性豊かなこの時期、ゆったりと豊かで充実した生活を送らせることができればと考え専攻科を設置した」と述べている（柴田昌一「人間的な信頼関係」『学校だより』1996）。そして、「本校高等部の課題としては、むしろ職業訓練より社会への移行期間として、個別のニーズに応じて幅広い社会生活スキル訓練の実践にある」とし、家庭生活、移動（交通）、買い物、社会資源の活用、地域の友人関係、経済生活、余暇など「地域生活に必要な生活スキル」を例示していた。これは、現在市販されている社会リハビリテーション研究会「社会生活力プログラム」の先導例としても注目される。

②本科とは異なる専攻科の独自性

私立養護学校の中で最も新しく専攻科を設置（1996年）した三愛学舎養護学校は、本科と専攻科を継続的にとらえて「5年の青年期教育」を強調しつつも、基礎的素養・個性の充実を図る本科3年に対して、個々の生活確立を図る専攻科2年の独自性を強調するところに特色がある。「三愛学舎の教育のねらい」に立ちかえる検討作業を通じて、「人格的ふくらみ」「人格的成長」の機会として青年期の教育を再構築していく方向が出され、専攻科が設立された。そして、専攻科に職業教育の重点を移すことによって、むしろ本科での教育をゆとりのあるものにし、「自己実現と職業的（社会的）自立」の両者をもとに追求していこうとする方向性を読み取ることができる（「三愛精神に基づいた学習内容の充実—自己実現と職業的（社会的）自立のはざままで—」1994）。

こうした中で、先発の専攻科においても変化が生まれている。例えば、旭出養護学校においては、専攻科教育を「成人期以降の人生

をどのように生きたらよいかを一人一人の状態に合わせて探る活動」ととらえるようになっていく（「旭出養護学校 専攻科の教育」1996）。専攻科の独自性が注目される近年、かつては途中離学型であった旭出養護学校・いずみ養護学校ともに専攻科への進学者が増えており、本科と専攻科の関係は本科の基礎の上に積み上げる継続・発展型に移行しつつある。さらに、4年制の青年部や自立支援センターを設けた見晴台学園、専攻科の上にさらに附帯教育事業として最長2年の研修科を設けた若葉養護学校、教育・生活支援センターを地域に開設した聖母の家学園など、青年期の教育と移行支援の営みはさらに多様に工夫・模索されている。

③発達障害のある青年の自分づくり

私立養護学校が知的障害を対象としてきたのに対して、1990年代以降には発達障害の青年を受け入れる専攻科が現れる。「学習障害児の5年制高校」である見晴台学園を筆頭に、やしま学園高等専修学校もそうである。発達障害の場合、個別の能力やスキルは高いのに、自信がなく、他者と関係を結ぶことが苦手である。そこで、内面的なもつれをほぐし、自尊感情や自己肯定感・自己有能感を育むのに時間が必要となる。「自分づくり」を支援するために、専攻科が活用されている。21世紀に入って開設された後発組の鹿児島島城西高校、鳥大附属にも軽度の知的障害や発達障害の青年が学んでおり、先発組の私立養護学校の専攻科にも発達障害の生徒が含まれるようになっていく。

④生涯保障体制の整備へ

最後に、私立養護学校の専攻科の特色として、学校法人による専攻科を含む学校教育の充実が、実は社会福祉法人や株式会社などの設立を伴った「生涯保障体制の整備」の一環において構想されていることを挙げよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

鳥取大学研究成果リポジトリ

(<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/Index.e>)

1. 渡部昭男, 障がい青年の移行支援教育—高等部専攻科の試み—, 教育と医学, 査読無, 56巻11号, 2008, pp.50-56。

2. 渡部昭男, 鳥取大学附属特別支援学校の高等部専攻科における教育—2007・08年度における「教養」の授業実践—, 地域学論集(鳥取大学地域学部紀要), 査読無, 5巻1号, 2008, pp.105-128。

3. 渡部昭男, 鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科における教育—2006年度における「教養講座」の実践—, 地域学論集(鳥取大学地域学部紀要), 査読無, 4巻1号, 2007, pp.25-46。

〔学会発表〕(計7件)

1. 渡部昭男, 青年期教育と移行支援—鳥取大学附属特別支援学校での取り組み—, 日本リハビリテーション連携科学学会・社会リハビリテーション研究会(平成21年度公開研修会), 2009年12月20日, 筑波大学東京キャンパス。

2. 渡部昭男, 記念講演 障がい青年の自分づくり—青年期教育と二重の移行支援—, 専攻科・滋賀の会, 2009年11月8日, 滋賀県立男女共同参画センター(滋賀県近江八幡市)。

3. 渡部昭男, 高等部専攻科における青年期の自分づくり—鳥大附属の試み—, 日本教育大学協会全国特別支援教育研究部門合同研究集会(第27回集会), 2009年11月7日, 弘前大学教育学部。

4. 渡部昭男, 中等後教育としての専攻科教育—障害青年の青年期教育と移行支援—, 日本教育学会(第68回大会), 2009年8月29日, 東京大学駒場キャンパス。

5. 渡部昭男, 基調講演 養護学校高等部等の専攻科における教育—「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援—, 全国専攻科研究会(第5回研究集会), 2008年12月7日, 鳥取市総合福祉センターさざんか会館。

6. 渡部昭男, 養護学校高等部等の専攻科における教育課程の特色, 日本特別ニーズ教育学会(第14回大会), 2008年11月19日, 大阪市立大学杉本キャンパス。

7. 渡部昭男, 鳥取大学附属養護学校の高等部専攻科における教育, 日本特殊教育学会(第45回大会), 2007年9月23日, 神戸国際会議場。

〔図書〕(計1件)

1. 渡部昭男, 日本標準, 障がい青年の自分づくり—青年期教育と二重の移行支援—, 2009, 全194頁。

〔その他〕(計1件)

報道関連情報

1. 著者インタビュー記事「渡部昭男教授 発達障がい児・者にこそ青年期の教育が不可欠 『附養カレッジ』の実践踏まえ二重の移行支援の必要性説く」, The EM(教育医事新聞), 2010年3月25日付け, p.12。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡部 昭男 (WATANABE AKIO)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号: 20158611

(2) 研究分担者: 無

(3) 連携研究者: 無